

らい 来ぶらり 47

特集 あなたの知らない過去

この道30年館

整理課長 境 経夫

一口に「30年」と言ってもかなたはモーロー、SFみたいにスーッとタイムスリップとは行かない。まずは1964年、現在の北別館から新館（現在の建物）に移った所から時間が動き出す。《15m平方の4室を若干ずらした十字型》の建物は、著名な前川国雄氏の設計。当時、斬新な建築として専門誌にも紹介され、暫くは参観者が引きも切らなかった。

当初3階にあった開架図書は約15,000冊。貸出開始は'69年。開架図書室は'73年1階に下り、雑誌室と合併し利用も目立って増え始める。学生数が今の半分位だから館内もまだのんびりしていたが、期末試験時だけは特別、席札を渡す入館制限も数年間続いた。3階閲覧室に冷房が付いたのは、つい数年前。それまでの蒸し風呂のようなあの混雑と熱気のもやもや、その中で床に座り込み情報交換にざわめく学生の山、また山！

利用者と言えば、アルバイトで学費を稼ぎ閲覧室に籠もって司法試験に賭けるとか、他館もマメに回り学位論文を仕上げるとかの熱心な人は昔も今も変わらないが、図書館に1度も入らないまま卒業した先輩も一昔前は珍しくなかった。憎めないのは試験間際、泣き顔で禁帯出の辞書を借りに来る人、目録室のカード箱の陰で友だちと鬼ごっこする人、etc.

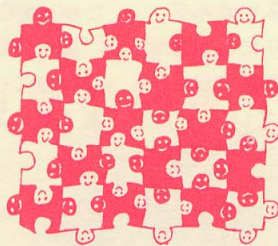
利用が増えるにつれ、図書館は'83年以降、「来ぶらり」創刊、ビデオ観賞会、セミナー等の新たなサービスを始め、入館者数も年々アップ。'92年度は291,000人と過去最高を記録。もっとも、トイレを使用するだけの人も、ロビーで人を待つだけの人もしっかりカウントされている。

建物にも思い出がある。台風一過後の屋上に満々と張った水、書庫壁沿いの泥水掻い出し、アスベスト工事の鬱陶しい夏など。そう言えば建物の外も最近めっきり様変わり。鬱蒼とした木立も明るく刈り込まれ、わが物顔に闊歩していた野良猫や鴉たちもほとんど姿を消した。

来春の図書館大改造後スペースも広くなり、開架図書も倍増するだろう。'89年にスタートした機械化も順調、数年後には開架図書の貸出も機械化、手続きも簡単になる。

ふり向けば4月、桜の花びら散りかかる中、新入生オリエンテーションの長い列。卒論と期末試験が慌ただしく過ぎれば春休み、グラウンドからの喚声に一瞬沈黙が破れる閲覧室の静寂。それらのサイクルを年々歳々くり返し、ふと気が付けば30年が茫々と夢の中。

これから10年後は、もはや21世紀!! 図書館も、そして皆さんもどのように変身していることでしょう。



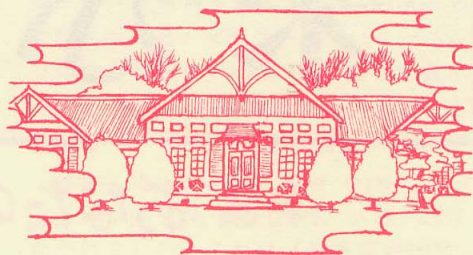
どよみかんの職人たち

ヤスリと鉄筆

今から31年前まで現役の図書館だった建物は、明治42年（1909）に建てられた平屋建てで、現在は一部が史料館に生まれかわって木陰に佇む。旧図書館だった当時は、北側にも部屋が並び、閲覧座席は100席ほど。東側に2階建て書庫と2棟のオンボロ仮書庫があって、旧制高・中等科時代以来の蔵書がまっていたものの、新しい学生用の図書は乏しかった。書庫といえば、仮書庫は窓も電気もないまっ暗闇。長いコードに裸電球をつけたのをカンテラみたいに手にさげて、書架を照らしながら本を探した。根太の隙間から笹が伸び、床下にはがま蛙がいた。

旧館では、ずっと館外貸出は禁止。開架図書も同様だ。本が貴重で数も少ないから、利用よりも保管第一。閉館時には、館員が毎日冊数を合わせて帰る。足りない、空腹をこらえて調べまくったものだ。窓口の係は、出納手などといわれ、昨今の運用課とは大違いの地味な役割で、少々暗かった。

その頃は、大学ができてまだ日が浅く、各研究室の専門書の充実が最優先であったから、図書館も、学生へのサービスは先送りにして、整理工場と化したのである。和漢書係では、カードを謄写版（ガリ版）で複製していた。ヤスリの上に原紙（ろう紙）を置いて、下書



きしておいた目録原稿を、鉄筆でガリガリと転写して孔をあけ、版を作る—これがガリ切り。各自愛用の鉄筆を研ぎすまし、彫り台ならぬヤスリに胸をかぶせて切り進む。江戸の職人姿がキマリそう。彫師の親方が若き日の佐野さん（現就職部長）だった。後年その同じ人の手で電算化の幕が切って落とされることになろうとは。次はできた版を使って一枚ずつカードを刷る。これは鬼のように連続する単純作業である。この「女工哀史」については、紙数がないから省略する。

手書きからの省力化であったガリ版カードは10年以上続いて、カードの黄金時代を支えたが、邦文タイプ外注がとって替わる。

あとはご存知のとおり一直線。学内LANに乗って、いよいよ来年、カードレスという第2幕の幕があく。

（洋書係 熊沢夕輝子）

朱肉とひまし油

バーコードラベルは、スーパーの専用物ではない。図書館の本にも貼ってある。大学図書館では、数年後の機械による貸出に備えて、6年前から本にバーコードラベルを貼ってきた。ラベルには、図書IDのほかに図書館名が印刷されているので、バーコードラベルの導入と同時に、それまで行ってきた蔵書印の押印を、一部を除いて廃止した。

本に押しあてられた蔵書印を見てみよう。

参考室にある『アジア歴史事典 全8巻』

のうち、第1～4巻には角型の蔵書印、第5～8巻には、丸型の蔵書印が押しあてられている。1960年9月14日以降、丸型に変わっている。

しかし、丸型に変わったあとも、時折、角型を使用していた。銅で作られ、四角い枠の中に「学習院図書記」の文字が篆刻された、一辺52mmのものである。押す場所は、標題紙の裏で、まがって押されないように、まずT定規を紙面にあて、深呼吸をして、定規の角を目がけて蔵書印をそっとおろす。やり直しができないので非常に緊張した。押された文字は、朱色も鮮やかで風格があり、きれいに

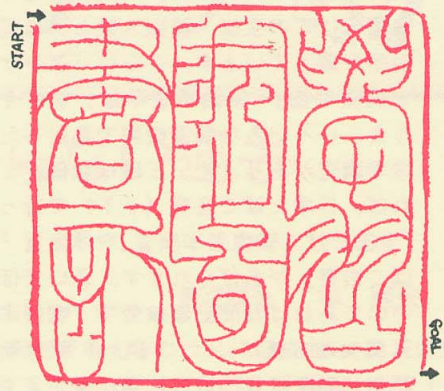
押せると、快感と満足感を覚えたものである。

角型は、少しでもずれるとまがっているのが歴然としてしまう難点がある。当時の図書館長末松保和教授は、デザイナー田保橋氏に新しい蔵書印の原画作成を依頼された。その結果、多少ずれて押しても見た目にわからない丸型となった。学習院のシンボルである桜の花を図案化したもので、花びらの間に「学習院図書」の文字が小さく散りばめてある。素材がゴムと木のため軽い。

蔵書印は、朱肉をつけて押すのであるが、使わないでくと硬くなるので、朱肉のケアが、また一仕事であった。1. 朱肉をくんである紅絹（赤い絹布）をピンセットを使ってはがす 2. 朱肉にひまし油を数滴おとす 3. 木の棒と竹べらを使って、朱肉とひまし油をまぜながら練りあげる 4. 朱肉を紅絹

で形よくくむ。以上がその手順である。

朱肉を練る作業は、スタンプインク内臓型に切り替えた1972年頃まで続いた。引退した朱肉とひまし油は、今、引き出しの奥で静かに眠っている。（受入係 久保田安子）



書物の風景 (41)

顕微鏡をのぞいて、アッと驚嘆の声を上げる。ごく身近にあるものが意外な姿でレンズの中に現れたとき、驚きは大きいにちがいない。幕末に近い、文化・文政・天保年間、約30年にわたって雪の結晶を観察していた殿様がいる。古河藩（現茨城県古河市）第11代藩主、土井大炊頭利位である。

『雪華図説新考』（小林禎 著作）は利位公が自家出版した『雪華図説』をもとに、利位公が雪の結晶を観察したその動機、雪の観察が行われた時代背景と気象、日本人が雪の結晶を六方対称のものであると認識するのはいつごろであるかという疑問

を、文学・文様・絵画を参考に推理していく。その当時、雪の結晶をどのような器具を使って観察していたのか。肝心の器具について、『雪華図説』には利位公の記載がない。利位公の蘭学の師であり、雪の観察を指導した、古河藩家老・鷹見泉石の遺品の中に、京都仁和寺の宮様から送られた

雪華図説 正統復刻版 雪華図説新考



“蘭鏡”借用の札状が残されている。“蘭鏡”は、いまでいう顕微鏡のことで、利位公はこれを使って観察したのだらうと著者は考察する。また、本書の結びともいえる第6章「雪にたいする日本的な目と西欧的な目」では、利位公の雪華図と、西欧の科学者の結晶図とを比較、検討している。日本人は、雪月花を愛でる「自然愛好家」の

目で結晶を観察し、一方西欧では「科学は観察にはじまる」という思想に育てられた目で観察している、と著者はいう。双方の優劣を問わず、その根本的な違いに注目している点が興味深い。やがて顕微鏡写真の発明と発達によって、雪の結晶は

本格的に科学の対象となっていく。克明に観察し描かれた利位公の結晶図は、愛刀の鍔にデザインされていまに伝わる。公の雪への執着もさることながら、著者の雪にたいする愛着の深さを感じさせる本である。（物理・化学図書室所蔵 請求記号459.9-K-4）（物理・化学図書室 皆川佳江）

参考室あれこれ

○日本人の喫煙率を知りたい。

簡単なコメントと数であれば、『日本国勢図会』の〔たばこ〕の項に販売本数や葉たばこの生産・輸出入数と共に喫煙者率が載っています。さらに『アンケート調査年鑑』『世論調査年鑑』などを使うと、いろいろな調査機関で集計した喫煙率調査があります。正確な数値がよければ、日本たばこ産業（ＪＴ）で行った『全国たばこ喫煙者率調査』や厚生省『たばこ白書』があげられます。急いでほしいのであれば新聞記事検索で“喫煙率36%男女とも横ばい ＪＴ調べ”朝日新聞朝刊1993年11月25日の記事が使えます。

○川端康成のノーベル賞受賞式での演説の英文がほしい。

方法はいろいろ考えられますが、まず個々の作家事典を見ます。『川端康成戦後作品研究史・文献目録』の〔ノーベル文学賞受賞関係〕の項で“美しい日本の私”川端さんの公演題目の記事を確認します。さらに〔翻訳目録〕の項で“Japan the beautiful and myself” Jiji Eigo Kenkyu v.24, no.3, 1969. p.19-27を見つけました。これは『時事英語研究』24巻3号で図書館で所蔵しています。

☆「夏目漱石辞典」から「大江健三郎文学辞典」など作家事典の発行は盛んです。以上は最近の事例を要約してみたものです。（参考係 甲斐静子）

小さな図書室の大きなお世話

「オーイ、司書、図書室に泊めてくれ！」成績通知表を片手に床に倒れ込むX君、Y君、Z君までも。「どうしたの」と尋ねると、仰向けになり、手足をピクつかせ「こんな成績じゃ家に帰れない。叱られる〜」と悲痛な叫び。成績が上がり意気揚々と駆け込んだ生徒たちの通知表を片手に「だから勉強しなさいって言ったでしょッ！」と、大声を張り上げる白衣のおばさんは、何を隠そうこの私。「静粛」などという言葉は瞬時にして忘れ去られ、X Y Zの悲劇をどう解決するか、居合わせた生徒たちの熱い友情の議論が後に続き、終業式当日の図書室はいつもこの騒ぎになります。四季折々の行事の中で、青春真っ盛り of 高等科生を中心に、喜んだり悲しんだり、時には怒り狂ったり、小さな図書室での大きなお世話とも言える人間模様が今日もまた繰り広げられています。（高等科図書室 中村清子）



お知らせ

虫の音の聞こえる季節になりました。落ち着いた雰囲気 of 図書館に足を運んでください。

○1階トイレが改造されました。

今まで1階トイレは男子用のみしかありませんでしたが、夏休み中に改造工事を行い、女子用もできました。

図書館も少しずつですが利用しやすいように変えていく予定です。

○大学祭期間中は閉館します。

11月2日（水）から7日（月）までの大学祭期間中は、ロビーと第1閲覧室が展示会場として使用されますので閉館します。

利用できませんのでご了承ください。

○リクエストを受け付けています。

読みたい本が図書館になかったら購入希望を出してください。用紙は目録室にあります。

来ぶらり No.47 1994年10月1日発行

発行責任者：片瀬 潔 編集委員：小林邦子 篠原三佳

学習院大学図書館 〒171 東京都豊島区目白1-5-1 ☎03(3986)0221